

2018年12月2日聖学院教会聖日礼拝説教

「人生の飼葉桶」
ルカによる福音書2：1-7

菊地 順

今年も、アドヴェントの季節が巡ってきました。毎年、毎年、訪れるアドヴェントの季節ですが、この訪れを、私たちは毎年、新たな思いをもって迎えているのではないのでしょうか。それは、この季節は、この一年の歩みを振り返る時でもあるからです。教会の暦では、このアドヴェントから一年が始まりますが、通常の世界生活では、一年の締め括りの時でもあります。そのため、誰しも、今年という一年を振り返りつつ、クリスマスの季節を迎えることになるのではないのでしょうか。また、だからこそ、それは去年と同じようでありながら、決して同じではないクリスマスの季節の訪れともなっているのではないのでしょうか。今年も、昨年と同じようにクリスマスのメッセージが語られ、クリスマスの諸行事が守られようとしています。しかし、それは、今年一年を振り返る中で迎えるクリスマスで、去年と同じものではありません。そのことを思いますと、また毎年思うことですが、クリスマスが一年の終わりにあるということは、実に意味深いことだと思います。それは、一年の歩みを振り返る中で、そこで与えられた主の恵みと慈しみを覚えながら、新たな感謝と賛美の思いを持って、クリスマスの季節を迎えることができるからです。今年も、その感謝と賛美の思いを持って、アドヴェントの季節を過ごして行きたいと思います。

ところで、この一年を振り返ったとき、皆さんは何を思い起こされるのでしょうか。それは、人それぞれ、さまざまだと思います。また、日本で起こった出来事、世界で起こった出来事を思い起こしても、それもさまざまだと思います。しかし、その中であつても、私たちの共通の痛みとなって記憶されているのは、やはり、今年もさまざまな自然災害があつたということではないのでしょうか。夏の猛暑、度重なった巨大な台風、北海道での地震と、自然災害が繰り返し引き起こされました。そして、多くの命が失われ、多くの方々が家や財産や思い出を失いました。海外でも、アメリカのカリフォルニア州では、今年も大規模な山林火災が起り、多くの命が奪われ、また多くの家屋が焼失しました。テレビの画面を通して映し出されるそうした被災地の光景には、誰しも胸が引き裂かれるような思いがするのではないのでしょうか。住み慣れた家を失い、避難所生活を強いられ、今後の再建もままならない失望の中におられる人たちの様子には、誰もが身につまされる思いがするのではないかと思います。

今日、私たちは、それぞれの家から教会に来ました。そして、礼拝が終わると、また家に帰ります。帰る家があるということは、当たり前のことかもしれませんが、考えて見れば、それは何と幸せなことなのではないでしょうか。風雨や寒さや暑さから身を守り、心からリラックスでき、一家団欒の時間が過ごせる家があるということは、人生の中でも、最も大切な、無くてはならない要素ではないでしょうか。ある建築家は、こんなことを語っています。「自分に慣れ親しんだものを周囲に存在させることで、人は、心の安定を保つ。慣れ親しんでいる社会、人、ものと共生する事で人の生活は完全になる。それを確認できるのが住宅で、だから人は最期をそれに包まれたいのだ」(週刊朝日編『死をめぐる 50 章』朝日選書 602、66 頁)。人間は、慣れ親しんでいるものを身近に置くことで安心し、その生活は完全になる。そして、それを確認できるのが住宅だと言うのです。自分の住宅の中で、人は安心し、その生活は完全になっていくと言うのです。それは、確かなことではないでしょうか。また、だからこそ、人生の最期にあっても、人は誰でも住宅に包まれていたいのだと言うのです。それも、十分理解できることではないでしょうか。それほどまでに、家とは、重要な場所なのです。それは、自分の体の延長線上にあるもので、自分と一体化したものだとも言えます。逆に、家がないということは、何と人々を不安にし、惨めにし、そして人間を不完全なものにしてしまうことでしょうか。

ところで、今日の聖書箇所には、こういう言葉が記されています。「宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」。宿屋は、自宅ではありません。ですから、「宿屋には彼らの泊まる場所がなかった」ということは、自宅を喪失するということとは違います。しかし、そこには、似たような状況が生じていたのではないのでしょうか。泊まる場所がなかったというのは、旅の疲れを癒し、くつろぐことができる場所がなかったということです。しかも、マリアはすでに身重で、臨月を迎えていました。そうした女性にとって、体を横たえ、疲れを癒し、体力を回復する場所がなかったということは、つらい経験であったに違いありません。それは、あるべき完全な形ではなかったのです。そこには、産婆さんもいなければ、温かい湯船もなかったのです。その上、泊まる場所さえなかったのです。そして、そうした不完全な中で、主イエスはお生まれになったのです。不完全な状況の中で、不十分な環境の中で、一つ間違えれば、悲惨な死につながりかねない状況の中で、主イエスはお生まれになったのです。

しかし、そこには、たった一つ、その不完全な状況を補うものがありました。悲惨な死から免れさせてくれるものがありました。それは、飼い葉桶でした。生まれたばかりの主イエスを受け止め、安らかに包んでくれる飼い葉桶が、そこにあつたのです。おそらく、母マリアは、生まれたばかりの主イエスを抱き続けることはできなかつたのではないのでしょうか。出産の疲れの中で、マリア

は体を横たえなければならなかったのではないのでしょうか。そして、父ヨセフも、家畜や夜の寒さから家族を守らなければならなかったのではないのでしょうか。生まれたばかりの主イエスをしっかりと受け止め、包んでくれたのは、飼い葉桶であったのです。おそらく、それは、家畜の餌や家畜たちのよだれで汚れきっていたのではないかと思います。家畜の匂いもしみこんでいたと思います。しかし、布にくるまれた主イエスは、その飼い葉桶に抱かれて、安らかに眠ることができたのです。

おそらく、この出来事を記したルカ自身が、このことに父なる神の深い配慮を見出し、大きな慰めを感じていたのではないかと思います。ルカは、主イエスの誕生を描いたこの2章の1節から21節までの間に、3度も、この飼い葉桶について言及しています。主イエスの誕生を語った7節では、「布にくるんで飼い葉桶に寝かせた」とあります。また12節では、「あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう」と語られています。また16節では、羊飼いたちは、「飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた」と記されています。ルカは、まるで乳飲み子の主イエスと飼い葉桶が一体でもあるかのように、繰り返し、飼い葉桶に言及するのです。そして、乳飲み子である主イエスを温かく包み、受け止めた飼い葉桶があったことに思いを寄せるのです。不完全な状況の中で、下手をすると命にもかかわるような劣悪な状況の中で、しかし、その危機から免れさせる、新しい命の誕生を見守り、支える特別な守りがあったことを、ルカは決して見逃さなかったのです。そしてルカは、そこに神の深い配慮の御手を見たのではないのでしょうか。

飼い葉桶があった、これはまた、私たちにとっても、慰めに満ちた記述ではないのでしょうか。それは、私たちの人生においても、しばしば困難な状況の中で、この飼い葉桶が用意されているということでもあるからです。人生の荒波の中で、その不安と苦しみと痛みの中で、私たちを包み、支えてくれる神の御手があるのです。飼い葉桶があるのです。そして、それは、時には人であったり、物であったり、出来事であったりするかもしれません。しかし、それは突き詰めて行くと、この教会に突き当たるのではないのでしょうか。私たちを、人生の困難な状況の中で、その最後のところで受け止め、支えてくれるのは、主イエス・キリストを頭とする、この教会ではないのでしょうか。この教会こそが、この世に延ばされた神の特別の配慮の御手であると言っていいのではないのでしょうか。この御手に支えられて、私たちは、人生の荒波を踏破し、そして人生の最期をも、安心して迎えていくことができるのではないのでしょうか。たとえ、家を失ったとしても、家族を失ったとしても、また故郷を失い、天涯孤独の身になったとしても、私たちには、私たちを受け止め、支えてくれる神の御手があるのです。教会があるのです。その意味では、教会とは<人生の飼い葉桶>

であるとも言えるのではないのでしょうか。

ただ、ここで確認しておかなければならないことは、その教会も、地上にあってはさまざまな問題を抱えているということです。地上に現に存在している教会は、現実存在しているゆえに、また問題をも抱えているということです。ある人（ティリッヒ）は、そのことを＜潜在的教会＞と＜顕在的教会＞という言葉でもって区別して語りました。＜潜在的教会＞とは、あるべき理想の教会です。しかし、それは目に見えません。それに対し、＜顕在的教会＞は、目に見える現実の教会ですが、そこにはさまざまな問題があるのです。ですから、＜顕在的教会＞は絶えず＜潜在的教会＞を覚えながら、襟を正して行かなければならないのです。

ところで、話は少し変わりますが、今年は、アメリカの公民権運動の指導者であったマーティン・ルーサー・キング牧師が暗殺されてから、ちょうど 50 年目の節目の年を迎えています。1968 年の 4 月 4 日に、キング牧師は、テネシー州のメンフィスという街で、暗殺者の凶弾にたおれて亡くなりました。享年 39 歳でした。あれから 50 年が経ちました。そのため、今年は、アメリカの主だった雑誌、『タイム』とか『ライフ』も、キング牧師の特集記事を組み、その足跡に光を投げかけています。そして、改めてキング牧師が見た夢について、思いを馳せています。ご存じのように、キング牧師は、リンカーンの奴隷解放宣言から 100 年経った 1963 年の 8 月に、リンカーン記念堂の前でもたれたワシントン大行進の集会の最後で、「私には夢がある」というスピーチを行いました。そして、こう語りました。「私には夢がある。いつの日かジョージアの赤土の丘の上で、かつての奴隷の子孫とかつての奴隷主の子孫が、兄弟愛のテーブルに仲良く座ることができるようになるという夢が（ある）」と語りました。また、「私には夢がある。今は小さな私の 4 人の子供たちが、いつの日か肌の色ではなく内なる人格で評価される国に住めるようになるという夢が（ある）」と語りました。キング牧師は、一人ひとりが、白人も黒人も、兄弟姉妹として互いに尊敬し合う中で、その肌の色によってではなく、その人格によって評価される社会が出現することを夢みたのです。そして、そうした社会を＜愛の共同体＞（Beloved community）と呼び、そうした社会の実現を目指したのです。＜beloved＞とは＜最愛の＞という意味です。そうした最愛の愛が支配する＜愛の共同体＞を夢みたのです。そして、そのために闘い、そして暗殺されたとも言えます。

しかし、この＜愛の共同体＞というのは、教会の原型であるとも言えるのではないのでしょうか。主イエス・キリストに示された神の愛に基づいて建てられたのが教会です。そこでは、すべての者が、兄弟姉妹としての愛によって結び合わされ、互いに仕え合いながら、神の国を目指すのです。そして、それは、

ヘブライ人への手紙の言葉を用いるならば、「天にある故郷」を求め、またそれを先取りしている共同体でもあるのです。それが、教会です。そして、それは2000年の歴史を持っています。確かに、それは長い間、国家と深く結びついてきました。しかし、ご存じのように、今から500年前の1517年に宗教改革が起こり、プロテスタント教会が誕生しました。そして、次第に国家とは直接結びつかない教会が誕生していったのです。それは、一般に「自由教会」と呼ばれていますが、それは国家と結びついた国教会が国家の財力で維持されたのに対し、自分たちの自主的な献金でもって教会を支えることになりました。それは、何よりも、自分たちの信仰の自由を守るためでした。そして、その多くは、いわゆる地縁・血縁関係を超えて形成されていったのです。血縁や地縁を超えて、キリストにある兄弟姉妹の交わりを作り、乳飲み子から高齢者に至るすべての者が、キリストを頭とする家族を形成していったのです。そして、生まれた時からこの世を去る時まで、教会生活を人生の基軸とする生活が営まれるようになったのです。

以前、日本でも、大分前の話になりますが、「ゆりかごから墓場まで」(from the cradle to the grave)という言葉がよく聞かれました。それは、第二次世界大戦後のイギリスにおける社会福祉政策のスローガンであったものですが、教会の交わりは、正に「ゆりかごから墓場まで」生涯に渡って続く交わりでもあるのです。人間の交わりは、しばしば人生の節目、節目において中断することがあります。大学進学とか就職とか結婚とかで、住む場所も変わり、人間関係も変わります。そして、その度ごとに、新しい人間関係の構築が求められます。しかし、教会の交わりは、確かに教会を変えればその交わりも変わりますが、キリストを頭とする兄弟姉妹の基本的な交わりは変わらないのです。それは、どこに行っても同じです。海外に行っても同じです。そのため、その交わりは、正に「ゆりかごから墓場まで」続くのです。そして、それは、地縁や血縁を超えた交わりであり、さらに国や民族をも超えた交わりなのです。そして、それは正に、天にあるふるさとを先取りしたような交わりなのです。

確かに、先ほども触れたように、この地上の交わりは、天の故郷の先取りではあるとしても、また一方では、さまざまな問題や課題を抱えているのも事実です。だからこそ、また熱心に天にある故郷、あるべき教会の姿を追い求めて行かなければならないと思います。この教会について、パウロは、コリントの信徒への手紙一の12章12節以下で、豊かに語っています。この箇所は、何度もお聞きしているところだとは思いますが、改めてそのところをお読みしたいと思います。

体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、

体は一つであるように、キリストの場合の同様である。つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと、自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています」。少し飛んで 20 節から、「だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです」。少し飛んで、24 節の後半から、「神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせ、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。」(12 章 12-26 節)

パウロは、すべての兄弟姉妹は、キリストを頭とする、一つの体なる教会の一枝であると語るのです。しかし、それはキリストにあって一つとされている枝々なのです。キング牧師の言葉で言えば、＜愛の共同体＞なのです。そして、キリストを頭とするこの教会は、この世に存在すると同時に、この世を超えた存在でもあるのです。それは、この世に延ばされた父なる神の御手に支えられ、強められ、導かれている存在でもあるからです。そこに、私たちを包み、支えてくださる、父なる神の配慮があるのです。そして、それは、乳飲み子の主イエスを包み、支えるために、飼い葉桶を用意された父なる神の配慮に連なるものなのです。

この一年も、いろいろなことがありました。中には悲しいこと、苦しいこと、不安なこと、苦悩としか呼べないこともあったかもしれません。しかし、私たちは、このアドヴェントの最初の聖日に、この礼拝へと招かれ、主にある兄弟姉妹の交わりへと招き入れられているのです。ここに、神の配慮、神の御手があります。乳飲み子の主イエスを包み、支えた飼い葉桶に示された神の守りがあります。アドヴェントの第一聖日に、私たちは、改めてその恵みに心に向け、神に心からの賛美を奉げたいと思います。そして、クリスマスに向けて、この交わりへと、一人でも多くの方たちを招き入れて行きたいと思います。